

なごや「聖歌」だより 1月号'09



聖歌は神学

降誕祭のカノンを聴きながら、あちこちに正教の藉身(受肉)の神学が歌われていることに改めて気づかされました。

造物主は其手にて造りし人の亡ぶるを見て、天を傾けて降り、神聖なる潔き童貞女より實に身を取りて、人の全性を活かし給ふ、彼光栄を顕したればなり。(第1歌頌トロパリ)

神が創造した人間の祖アダムは、本来の生き方である神との交わりよりも、自分の力と考えで生きることを選び、人類はどんどん神を離れ、滅びの道を進んでゆきました。それを深く憐れんだ神は、その独り子を人間として遣わし、救いの道を開きました。「神が人となる」、あり得ないことがおこりました。あえて神は「天を傾けて」降り、処女から生まれ、人が「いのち」を取り戻すための救いの道を開きました

正教会の礼拝には、集まって神を賛美すること、祈願すること、信仰告白などさまざまな側面がありますが、聖歌の歌詞となる祈禱文には神学的な意味が表されています。

オスマントルコに支配された400年や共産主義下で宗教弾圧された70年間、十分な神学教育も行えない状況の中で正教の正しい信仰が保たれたのは、奉神礼を行い続けてきたからです。祈禱書を読み、歌うことで、正教会の聖書解釈、神学的な意味が伝えられました。祈禱文は使徒たち、聖師父たちが聖神に導かれて磨き上げたことばです。ただの美しい詩やムード音楽ではありません。教会が教え

る正教の正しい信仰、その深い意味が示されています。

あらためて、味わってみたいと思います。主日や祭日や祈禱文は教会にある『八調経』や『祭日経』などに載っています。楽譜もできるだけ祈禱文を含めて作っています下記ホームページでも見ることができます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/prayerbook/index.html>

聖歌練習

♪名古屋: 毎主日の聖体礼儀後のミニレッスン。

降誕祭の聖歌、ずいぶん上達したと思います。今後の課題は他のパートをよく聴いて、調和して歌うことです。代式後の練習では、発声などの基礎練習も行います。ご参加ください。

○11日代式後に「神現祭」の練習。

代式祈禱は「お休み」ではありません。信徒が「教会を守る」祈りです。二、三人の集まって祈るところに「私はいる」とイイススは言いました。

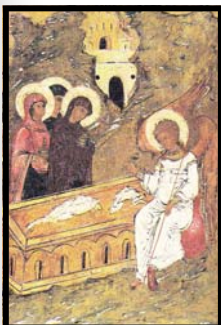
♪半田: 1月 8日(水) 11:45分頃から。

神現祭の練習をします。

1月の指揮当番

4日 ピーメン松島
18日 エレナ広石

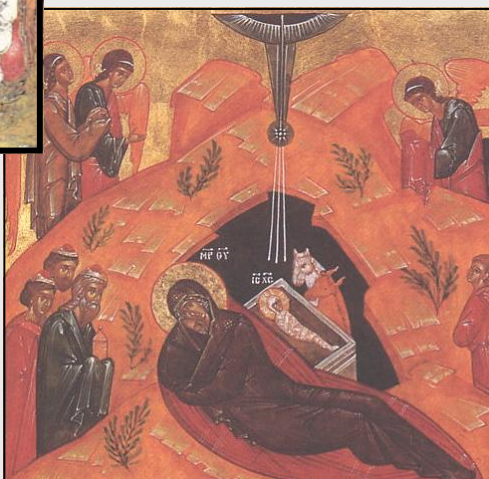
25日 マリア松島



復活祭のイコン

降誕の意味

— イコンと聖歌 —



イコンも聖歌も礼拝の中で神の真実を示します。

イイススの救いとは、十字架、死、復活に至る救いです。左の降誕のイコンには、生まれたばかりのイイススは暗い「洞窟」で、グルグル巻きの産着を着せられ、四角い箱に寝かされています。正教会の伝統的解釈によれば「洞窟」は「墓」を、グルグル巻きの着物は死装束を、四角い飼い葉桶は棺を表し、「死」を暗示しています。また、三人の博士の持ってきたプレゼントも、

その世々の王たるによりては鍊金を、萬有の神たるによりては乳香を、不死の三日の死者たるによりては没薬を...

(挿句のステイラ)

正教会の降誕祭は、ただのロマンティックな「聖夜」ではありません。神が人となったのは、人が神になって行くため、信仰を受け入れることは、神の示す「狭き門」を通る旅、十字架、死、復活の道のりの始まりでもあります。



「主の名を讃め揚げよ」が歌われるポリエレイは徹夜祷のなかで最も美しい瞬間です。平日早課では歌われず、大きな祭日や主日の早課のみに歌われます。

「ポリ・エレイ」とは「たくさんの憐れみ」を意味します。ここでは134聖詠135聖詠が続けて歌われますが、その後半「その憐れみは世世にあればなり」という句が何度も繰り返されることから名付けられました。エレイ「憐れみ」を「油」と掛けて、多油祭と訳されることもあります。

134聖詠では主の「選び」を讃えます。主は救いの計画においてイスラエルの民を選び、私たちに教会に招きました。「あなたがたを聖なるものとする『霊(神°)』の力と、真理に対するあなたがたの信仰によって、神はあなたがたを救われるべきもの

の初穂としてお選びになったからです。(2テサロニケ1:13)」

135聖詠の最初の三分の一は神の創造のわざを、真ん中はイスラエルの民のエジプトの奴隷からの解放、最後は神が今も働き続け、私たちを生かし続けていることを讃えます。神は創り、救い、とどまり、終わりの日まで私たちに与え続けます。『信経』ではもっと明確に、父と子と聖神の至聖三者の神として歌われています。

主日にはポリエレイが行われます。日曜日は創造の始まりの日、主の復活による「過ぎ越し」の日、教会にとどまり、あふれる聖神の降臨の日です。

135聖詠の一行ごとに「その憐れみは世世にあればなり」が繰り返して歌われ、神のすべての「わざ」は永遠の『憐れみ』であることが賛美されます。

ところで、正教会の祈禱のなかで一番頻りに用いられることばは『憐れみ』だそうです。私たちが教会で触れ、見、聴き、味わうこと、イコンの前のロウソクの炎のゆらめき、声に出して唱える祈り、かぐわしい乳香、ご聖体、すべては神の『憐れみ』です。神はご自分との交わりのために、礼拝を『憐れみ』として与えられました。神を見いだしてゆくことは、神の大いなる豊かな限りない憐れみを深めてゆくことでもあります。

暗かった聖堂に一本ずつロウソクが灯され、堂中央のシャンデリアに明かりが灯り、開かれた王門から福音書をかかげた司祭が歩み出てきます。ギリシアの修道院ではこのとき二つのシャンデリアを揺らし、光と影の交錯を演出します。

日本では全文は歌われず、いくつかの句が抜粋されて美しいメロディで歌われます。

このあと、主日では『復活のエフロジタリア』という5つのトロパリが「主や爾は崇め讃めらる」というリフレインを伴って歌われます。祭日には、日本を含むスラブ系の教会では『讃歌』(「生命を賜う……」など)が歌われ、主のわざを讃えます。

参考資料:『聖詠経』、新共同訳聖書『詩編』、Christ in the Palms Patrick Henry Readon, *Orthodox Study Bible*, 正基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)、『詩編』フランシスコ会訳、『正教会の音楽』(J.V. Gardner)

聖詠と歌う 「讃歌」 (ヴェリチャニエ)

正教会の聖歌には聖詠とリフレイン(附唱)を交互に歌うものが多くあります。古代ビザンティンからの伝統です。たとえば、祭日の聖体礼儀のアンティフォン、領聖詞などです。

祭日早課でポリエレイに続けて歌われる「讃歌」も聖詠と交互に行うように指示されています。「讃歌」はスラブ系の教会だけの伝統でギリシア系では歌われないので、『祭日経』ではなく『連接歌集(イルモロギ)』の327ページに「祭日のポリエレイ及び讃揚詞ならびに抜粋聖詠」として載っています。

たとえば「降誕祭」の例を見ると、「生命を賜うハリストスよ、我等爾今我等のために婚姻を知らざる……」を65、67、109、100聖詠などの句の間にはさんで繰り返し、最後には「光栄は父と子と聖神に帰す」と「今も何時も世世にアミン」のあとに歌い、アレルイヤを3回歌って終わります。全堂炉儀が行われる

ため、聖詠と交互に何度も繰り返すことで炉儀が終わるまでの時間をカバーします。日本では聖堂がそれほど広くないため「讃歌」の「生命を賜う……」の部分だけを3回繰り返すのが一般的です。ロシアでは最初の1回は神品団が歌い、2回目からは聖歌隊が繰り返し、最後にまた神品団が歌う習慣もあります。

「讃歌」は『連接歌集』では「讃揚詞」という名で書かれています。同じものです。

祭日の単音楽譜にはイルモス第9歌頌のところに「生神女の歌に代えてに『讃歌』を歌う」と指示されています。通常、生神女を讃えて「ヘルビムより尊く……」を歌うところですが、祭日には附唱「我が霊や、……崇め讃む」をつけてイルモス第9歌頌を歌います。ギリシア語やスラブ語では「崇め讃む」から名称が取られているために、混同したものと思われすが、これは「讃歌」とは別物です。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料